

市史通信

第50号

【発行日】2024年7月31日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜市中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 sisiryoyou@ml.city.yokohama.jp
 【ホームページ】
<https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/yokohamashi/gaiyo/shishiryoyou/>

【目次】

- 『令女界』読者グループR・J・Rの活動と女性たち
- 地形図でたどる野毛山の周辺
- 「神奈川県内製産実用工芸品調査書」(1934年)について
- 所蔵資料紹介
『モード』第17号(1957年3月)
- 市史資料室たより



R・J・R横浜支部第1回茶話会
 『令女界』第15巻第3号(1936年3月)より 横浜市史資料室所蔵

『令女界』読者グループ R・J・Rの活動と女性たち

はじめに

『令女界』は一九二二(大正一一)年四月に、東京の宝文館から少女雑誌として創刊された月刊誌である。一九四四(昭和一九)年五月号から一九四六(昭和二一)年三月号までは休刊。戦後再開して、一九五〇(昭和二五)年九月号まで続いた。岐阜県出身の北村秀雄が編集に従事して、女学生から「女子青年」向けの雑誌として定着させた。一九三五(昭和一〇)年三月に、全国的な『令女界』読者グループ「R・J・R令女純情連盟(以後、R・J・Rと記載)」を結成した。

横浜市史資料室は、横浜支部を中心に各地のR・J・R支部に関する写真を取めたアルバムを所蔵している。横浜の詩人篠原あや(本名吉田静子、旧姓田中)から寄贈を受けた資料である。篠原は一九一七(大正六)年に、現在の中区に生まれた。一九三五(昭和一〇)年に、高木高等女学校専攻科(現在、英理女子学院高等学校)を卒業した。その頃から『令女界』を愛読し、R・J・R横浜支部の幹事であった。篠原とその資料については、羽田博昭が、横浜市史資料室の複数の刊行物で紹介している。

筆者は、『令女界』読者グループ「R・J・R令女純情連盟」横浜支部について『横浜市史資料室

紀要』第一四号(二〇二四年)で、主に『令女界』に掲載された「R・J・R告知板」から、横浜支部の行事報告を紹介した。

横浜市史資料室では、昨年度二冊の『令女界』を収集した。第一五巻第三号(一九三六年三月)と第一八巻第一号(一九三九年一月)である。いずれも横浜支部の報告が掲載されている。本稿では、これらの資料を含め横浜支部の行事をまとめ、改めて紹介したい。

第一回「茶話会」と北林透馬

全国的なR・J・Rが結成された翌一九三六(昭和一一)年に、横浜支部が発足した。上の写真は、第一回横浜支部「茶話会」のものである。茶話会は一月七日午後一時より、横浜山手の北林透馬邸で開かれた。前列右から二人目に巽(たつみ)寿美子(宝塚少女歌劇団の男役)、二列目左端が作家の北林透馬(一九〇四―一九六八)である。『令女界』第一五巻第三号に、報告と共に掲載された。同誌グラビア頁(図1)の撮影に訪れていた巽と北林を囲み、小説や歌劇の話などをしたという。最後に福引をして、午後五時に閉会した。参加者は一名。報告には、「ほんとに楽しい午後でした」と記している。



図1 北林透馬「僕のティー・パーティー」
 『令女界』第15巻第3号より 横浜市史資料室所蔵
 後列右に北林、前列右に巽寿美子が写る。

表1 R・J・R横浜支部行事

	年	月	日	行 事	場 所	人数	巻	号	写真掲載	
									誌面	アルバム
1	1936	1	7	第1回茶話会	北林透馬邸	11	15	3	○	
2	1936	2	11	第2回茶話会	北林透馬邸	14	15	5	○	○
3	1936	3	15	3月例会	北林透馬邸、ジャーマン・ベーカリー	19	15	7	○	
4	1936	12	20	クリスマス	北林透馬邸	17	16	3	○	○
5	1937	1	31	銀座テルミー美容科学研究所員講習	北林透馬邸	10	16	5		
6	1937	5	23	5月の集ひ	森永キャンディー・ストア	10	16	8		
7	1937	10	3	10月の集ひ(北林透馬北支派遣送別会)	喜久屋フルーツ・パーラー	9	16	12		
8	1937	12	19	12月ハマの集ひ	喜久屋フルーツ・パーラー	4	17	3		
9	1938	1	30	1月例会	喜久屋フルーツ・パーラー	11	17	4		
10	1938	2	13	2月の会合	吉の谷	8	17	5		
11	1938	3	20	3月例会	吉の谷	4	17	6		
12	1938	4	17	4月の集ひ ビクニック	二子玉川	4	17	7		○
13	1938	5	22	5月例会 イチゴつみ	大船	7	17	8		○
14	1938	6	5	6月例会 海軍病院慰問	横須賀海軍病院	4	17	9		
15	1938	10	30	10月例会	[喜久屋フルーツ・パーラー]	5	18	1	○	○
16	1938	[11]	4	[11月] 例会	会員宅(青絵家)	4	18	2		
17	1938	12	4	12月例会	[会員宅(田中家)]	6	18	3	○	○
18	1938	12	25	臨時集會 忘年会	永楽軒	8	18	3	○	○
19	1939	1	8	新年会 満3周年	永楽軒	11	18	5	○	○
20	1939	2	[19]	2月例会	杉田梅林	8	18	5		
21	1939	3	19	3月の集ひ	喜久屋フルーツ・パーラー	7	18	6	○	○
22	1939	4	23	4月例会	不二家	9	18	7		○
23	1939	5	28	5月例会 苺つみ	大船	10	18	8		○
24	1939	6	[25]	[6月例会 鎌倉名所古跡めぐり]			18	7		
25	1939	7	23	東京・横浜支部合同 7月の集ひ 大船スタジオ見学	大船スタジオ	30	18	10	○	
26	1940	3	17	東京・横浜支部合同ハイキング	大倉山	34	19	6	○	○
27	1940	4	21	東京・横浜支部合同会合	喜久屋フルーツ・パーラー					○
28	1940	5	19	京浜支部創立会	八重洲園	42	19	9	○	○
29	1940	6	16	ハイキング	三ツ池					○
30	1940			ハイキング	神武寺	20	19	12		
31	1940	11	24	集會	八重洲園(京橋)		19	12		○
32	1941	4	5	横浜ハイキング	八聖殿・三溪園	4	20	6		
33	1941			山の生活	山中湖畔	8	20	10		

『令女界』「R・J・R告知板」掲載報告・予告、及び篠原資料アルバムより作成した。

25～27：東京・横浜支部合同行事、28以降：京浜支部。

巻号は『令女界』のもの。記入がない場合は、篠原資料アルバムの書き込みより記載。

[] は、予告などから推定したもの。

『令女界』に掲載された写真がある場合は「誌面」欄に○を、篠原資料アルバムに収録している写真には「アルバム」欄に○をつけた。



図2 『令女界』第15巻第3号表紙
 落谷虹児画 横浜市史資料室所蔵

第一五巻第三号をみてみよう。表紙と口絵に落谷虹児が描く美しい女性像が、カラーで掲載されている(図2)。そして目次には、グラヴィア特集、小説、少女随筆、「誌上封切新映画」、漫画などが並んでいる。

『令女界』「R・J・R告知板」は全国各支部の行事報告や予告を、写真入りで掲載している。横浜支部の報告や写真もみられる。表一は、一九三六(昭和一一)年の第一回から一九四一(昭和一六)年までの記事をまとめたものである。原誌は複数の施設で所蔵しているが、欠号がある。また、報告が掲載されなかった行事も考えられる。しかし、篠原資料アルバム(以下、アルバムと記す)の写真と対照することで、横浜支部に集う女性たちの活動がより鮮明になるだろう。

確認できた三三件の行事のうち、アルバムには一六件の写真を収録。「R・J・R告知板」は、一二件の写真を掲載して



図3 横浜支部10月例会 横浜市史資料室所蔵 篠原あや資料
 『令女界』第18巻第1号(1939年1月)に掲載。

この稿では、『令女界』の内容と、R・J・R横浜支部の行事及び参加者についてみてきた。これらの資料は、室内展示で紹介する。(上田 由美)

『令女界』掲載内容

新進作家の北林は、一九三〇(昭和五)年に中央公論社が企画した「文壇アンデパンダン」において「街の国際娘」が入選したことを機に、本格的に文壇にデビューした。そして、その頃新たなペンネーム「北林透馬」を名乗った。『令女界』では一九三六(昭和一一)年に、「青銅聖母像(ブロンズのマリア)」を連載していた。北林の姪が横浜共立学園に通学しており、友人が『令女界』の読者であった。その縁もあり、北林は自宅を提供した。以後、横浜支部との関係が続き、北林邸での集会がもたれるようになる。篠原(ペンネーム・智恵利)は第二回から参加し、横浜支部の幹事となった。

横浜支部の行事

『令女界』「R・J・R告知板」は全国各支部の行事報告や予告を、写真入りで掲載している。横浜支部の報告や写真もみられる。表一は、一九三六(昭和一一)年の第一回から一九四一(昭和一六)年までの記事をまとめたものである。原誌は複数の施設で所蔵しているが、欠号がある。また、報告が掲載されなかった行事も考えられる。しかし、篠原資料アルバム(以下、アルバムと記す)の写真と対照することで、横浜支部に集う女性たちの活動がより鮮明になるだろう。

内容には第一回茶話会のものを含め、アルバムに収録されていない写真が三点確認できた。会場は、当初北林邸であったが、その後は喜久屋フルーツ・パーティーが多くなっている。参加人数は当初一〇人を超えていたが、徐々に減少し一けた台になっっている。そのうちに東京支部と合同の企画が多くなり、やがて一九四〇(昭和一五)年に両者が合併し、京浜支部となった。

ハイキングが目立つ。戦時下に、体力の向上を図る目的があったのだろう。一九三八年一〇月例会の参加者

第一八巻第一号には、一〇月三〇日に開かれた、例会の記念写真(図3)と報告記事が掲載された(表1、15)。写真はアルバムに収録され、『市史通信』そのほかで何度か紹介しているが、この号に掲載されていることがわかった。会場は喜久屋フルーツ・パーティーのようだが、写真は写真館で撮影されたものだろうか。一〇月は会員の集まりが悪く、当初予定した日は流会、次に開催したこの会合も参加者は五人であった。報告記事では出席者の少ないことを嘆いているが、写真には笑顔で収まっている。後列の三人は横浜支部の幹事で、右から智恵利(篠原)、佐川美智、青絵潤子。前列右は小島幾美子、左は水澤恵子である。報告記事には出席者名が掲載されており、アルバムの書き込みと収録された複数の写真をみていくことで、人物の特定が可能になる。当時は和服を着る女性が多く、なかには洋装もみられるようになってきた。佐川と水澤は洋装である。佐川は看護婦で、普段から洋服を着ていたのだろう。二名とも、ほかの写真でも洋服姿である。

おわりに

この稿では、『令女界』の内容と、R・J・R横浜支部の行事及び参加者についてみてきた。これらの資料は、室内展示で紹介する。(上田 由美)

地形図でたどる 野毛山の周辺

■地形図とは

地図とは、広義には「ある地域の地理情報を表現した図版」、より厳密には

「地表の一部を測量し、その地理情報を一定の縮尺と方位のもとで記号によって表現した平面図、かつ近代的な印刷によって不特定多数を対象に作成された図版」とでも定義できるだろうか。後者の定義を最も満たしているのが、国の

機関や地方自治体などの公的機関が測量・作成した、地形図である。地形図は、地形のみならず様々な地理情報（水系や植生、土地利用、建造物や交通路の配置、行政界や地名など）が盛り込まれ、あらゆる地図の基本図となっている。



【図1】5千分1「横浜実測図」(部分)

1881(明治14)年発行、内務省地理局、横浜都市発展記念館所蔵、約69%に縮小

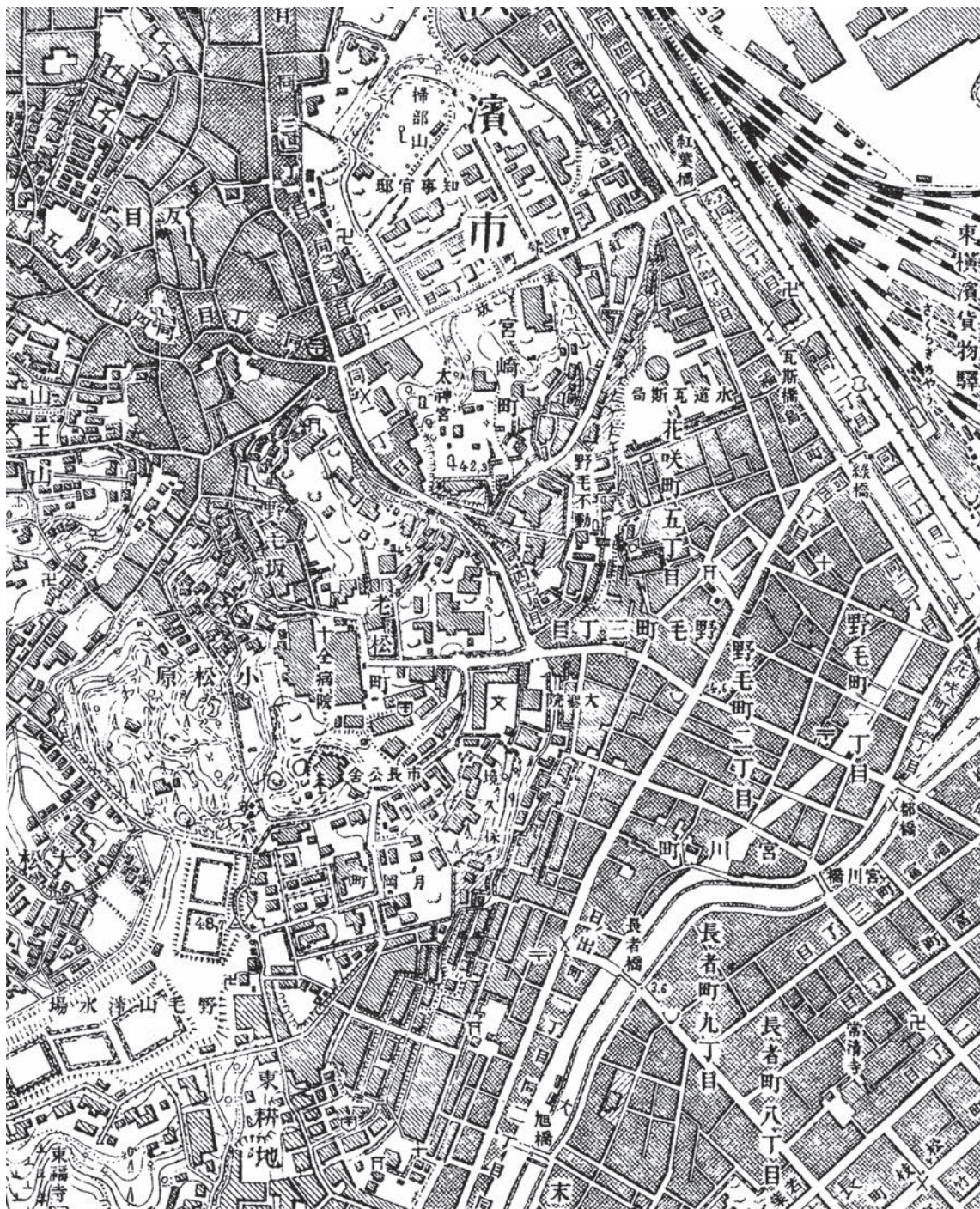
そもそも日本の国土の測量と地図の作成は、明治時代、国のおよそ二つの機関によって着手された。一つは内務省であり、もう一つは陸軍である。前者は組織の改正を経て、一八七七(明治一〇)年に内務省地理局となった。後者もやはり幾度の改組を経た後、前者の事業を統合し、一八八八(明治二二)年、陸軍参謀本部陸地測量部が発足した。以後、昭和時代の終戦まで陸地測量部が日本の官製地形図の作成を担い、戦後は現在の国土地理院がそれを受け継ぐ。

本稿では、官製だけでなく自治体の作成したものも含め、その中でも特に縮尺が大きな地形図を時代順に比較しながら、当室の所在する野毛山地区(西区老松町)周辺の景観の変遷をたどってみたい。図一から図四のいずれも、おおよそ同じ領域を元の地図より抜き出した。

■明治期の野毛山

陸軍の地図作成事業が本格化する以前、東京・大阪・横浜・神戸の四都市については、内務省地理局が縮尺五千分一の大縮尺地図を「実測図」の名称で発行している。図一は同局が作成した「横浜実測図」の一部で、一八七四(明治七)年から七八(同一一)年に行われた測量に基づき、一八八一(明治一四)年に発行された。

この「横浜実測図」には、市制・町村制が制定される以前の、郡区町村編成



【図2】1万分1地形図「横浜」(部分)
1922(大正11)年測図、陸軍陸地測量部、横浜開港資料館所蔵、約138%に拡大

法下の「横浜区」が描かれている。図一はそのうち野毛山周辺の部分である。野毛山とは、かつて戸部村の野毛浦と呼ばれる海岸の背後にある高台の通称で、鶴見川の右岸から根岸湾にかけて、横浜市の東部に連なる下末吉台地の一

部である。標高は五〇メートル程度以下で、その北東端は伊勢山や掃部山などとも通称される。さて、内務省の実測図が後年の官製地形図と大きく異なるのは、土地の起伏が等高線ではなく、「ケバ」と呼ばれる

短線で表現されていることである。傾斜線と平行に刻まれるケバは、太いほど傾斜が急であることを示し、斜面や崖などの土地の起伏を立体的にイメージできるような考案された。野毛山をめぐる土地の起伏もケバから読み取るこ

とができる。

図中央の野毛山の高台には、神奈川県師範学校(Normal School)や十全医院(Hospital)*図一および図二の図中では「十全病院」と表記)、老松学校(School)などの建物が配置されている。師範学校は間もなく鎌倉へ移る。

図を上側から右側へ横切るのは、東海道の芝生村(図外上)と横浜開港場の出入り口の吉田橋(図外右)とを結ぶべく、幕末に整備された横浜道である。野毛山に切通しを刻み、沿道周辺に「野毛町四丁目」や「老松町」などの町名を付した宅地が開かれているのがわかる。これらは、台地下の低平地野毛町一、二、三丁目ほか)や大岡川をはさんだ関外地区、開業直後の横浜停車場の設けられた埋立地(桜木町)などとともに横浜区に含められた。

一方、野毛山の南西側(図左下)一帯は雑木林や砂地が広がり、横浜区ではなく久良岐郡の一部を成していた。

■大正期の野毛山

縮尺とは、地表面の縮小率であり、地図において最も重要な指標である。縮尺の小さい地図は広域を概観するためのものであり、反対に縮尺の大きい地図は特定のエリアの地理を詳細に分析するのに用いられる。

陸地測量部は当初、二万分一(縮尺)で全国の地形図を作成する予定だった。しかし、多大な労を要することからこれを断念し、縮尺を小さくして大正時



【図3】横浜市(旧)3千分1地形図「新港町」「西戸部」「山下町」「南太田」(部分)
1931~1933(昭和6~8)年測図、横浜市土木局、横浜開港資料館所蔵、約42%に縮小

代までに国土を五万分一地形図でカバーした。やがて二万五千分一地形図の作成が始まり、戦後の国土地理院はそれを基本図に定めた。さらに横浜市を含めた六大都市の周辺については大正から昭和前期、これよりも縮尺が

大きく詳細である、一万分一地形図の作成が行われている。
横浜近傍の一万分一地形図は、一九二二(大正一一)年測図のものが最初である(図二)。一八八九(明治二二)年、市制が施行されて成立した

横浜市は、明治期のうちに二度の市域拡張を行った。その間、戸部・太田地区(久良岐郡戸太村)は横浜市に編入され、本図の範囲は全て市域内である。野毛山にはその最高地点に、一八八七(明治二〇)年に配水を開始した横浜水

道が浄水場を設けている。

早くより豪商の邸宅が建造された野毛山から、戸部・太田にかけての地域は、関内地区に勤める銀行員や会社員、あるいは市内の学校の教員など、主にホワイトカラー層の居住地として市街化が進んだようである。明治末期から大正期に最も人口が増加した。

■昭和戦前期の野毛山

地方自治体の作成する地形図は官製地形図よりも大縮尺であり、例えば横浜市は、一九二八(昭和三)年の測図を皮切りに、三千分一の縮尺の地形図を土木局より順次発行した(図三)。

横浜市は一九二三(大正一二)年の関東大震災において、低平地に展開した市街地が地震直後の火災でほとんど焼失したが、震災後には、土地の区画整理や街路の新設・拡幅、河川の改修、路面電車の軌道の新設・移設など、国・県・市によって都市インフラの復興事業が進められた。本図にはその成果が詳細に反映されている。

市街化の進んでいなかった下末吉台地の上はおよそ無事だったが、野毛山地区は火災の被害を受けた。その後の復興事業において、かつての横浜道である野毛坂の切通しは拡幅され、都橋方面ではなく、長者橋方面へまっすぐ下るルートに改められた。その路上には市電(長者町線)の軌道が敷かれ、一九二八(昭和三)年に開通した。日ノ出町の交差点では別に新設された日



【図4】横浜市(新)3千分1地形図「西戸部」「南太田」(部分)
1964(昭和39)年測図、横浜市計画局、横浜市史資料室所蔵、約42%に縮小

の出町線と交差し、また、一九三二(昭和六)年、京浜電気鉄道と湘南電気鉄道が連結する日ノ出町駅も開業。付近は新たな交通の要地となった。

また、野毛山の高台には都市公園の野毛山公園が整備され、一九二六(大正

一五)年に主な部分が開園した。横浜市十全医院(病院)は被災して他へ移転したが、その跡地に老松小学校が移っている。そして、老松小学校の跡地を利用して横浜市立図書館が一九二七(昭和二)年に竣工し、図書館に隣接して

震災記念館がその翌年に竣工した。やはり被災した野毛山浄水場は配水池(貯水池)として再整備された。

なお、三千分一地形図は三色刷り(黒・茶・水色)の豪華な地図だったが、戦争の影響で全てを発行できずに終わっ

ている。

■高度成長期の野毛山

戦後に改めて作成された横浜市三千分一地形図は、図郭(地図の区切り)が戦前のものと異なるが、一九五四(昭和二九)年より計画局(当初は建設局)が全市域(現在と同じ)を九〇枚の図で網羅し発行した。単色刷りだが、市街密集地の建物を一棟ずつ描いている点が、戦前の図よりも優れている。

図四は高度経済成長期の野毛山周辺である。老松小学校は新制の老松中学校となり、平沼家の邸宅跡に日本住宅公団の野毛山団地が建設された(一九五六年入居開始)。日ノ出町駅を通過する電鉄は京浜急行電鉄に統合されたが、市電は戦前と変わっていない。一九四九(昭和二四)年、野毛山公園のうち配水池の南西側のエリアなどが会場の一つとなつて、日本貿易博覧会が開催された。会場の跡地には翌々年、児童遊園が整備され、動物園をその一部に含む野毛山遊園地が開園した。

しかし、本図作成の一九六四(昭和三九)年、地下に配水池を新設するため、児童遊園は閉鎖され、動物園の部分が野毛山動物園として自立する。また、一九七一(昭和四六)年から翌年、市電の長者町線、日ノ出町線が撤廃される。市内の郊外では人口が急増し、中心部と連動して都市インフラの改造が急務だったのである。

(岡田直)

「神奈川県内製産 実用工艺品調査書」 (一九三四年)について

市史資料室では、「昭和九年 神奈川県内製産 実用工艺品調査書」(市史資料室所蔵資料一―一三三)と表紙にある資料(購入)を所蔵している。資料は厚さ三・五センチメートル程の簿冊で、後半に簿冊の表題に関わる調査資料が「調査材料」として綴じられており、前後にその他の資料が綴じられている。これらの資料の概要を前後にある様々な資料も含めて簡単に紹介する。

資料の概要

この簿冊の先頭に綴られている資料は、一九三一年(昭和六年)九月一六日起案、一八日施行の神奈川県商工課の文書である。内容は、蘭領アンボyna市(現インドネシア)淡路商店からの問合せに対する回答である。その他、前半・末尾に綴じられている資料は神奈川県商工課や神奈川県商工協会宛の各所からの通知や問合せ類とそれに対する商工課の回答の起案類である。

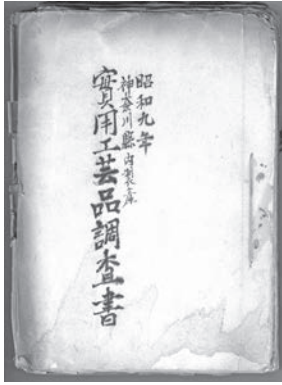


写真1 「昭和九年 神奈川県内製産実用工艺品調査書」
(市史資料室所蔵資料1133)

また、後半の「実用工艺品調査」も神奈川県商工課が行った調査の製造者・同業組合等からの回答であり、このことから商工課で文書作成に関わった人物か、これらの文書を継承した人物の手にあつた資料と言える。この資料に関連する資料としては、一九三二年(昭和七年)年―三四年の商工課や商工協会宛の通知・問合せ・年賀状等も同資料群に含まれている(資料番号一―一六三)。

一九三二年(昭和七年)年の神奈川県職員録を見ると、商工課で商工協会書記の一人が起案の押印と同姓であるので、同人物の手元資料の可能性があり、挟み込まれている年代・内容が異なる一九四〇年の資料や同時に入手した資料から、これらの資料がその後別の人物に継承されて残ったものと考えられる。

次に先ず前半・末尾に綴じられている資料から紹介しよう。

問合せ・通知等の資料

前半・末尾の資料は各所からの通知類や問合せ、それに対する商工課からの回答等である。その中からいくつかを紹介する。

先に触れた最初に綴じられている淡路商店からの問合せは、コプラ・丁字・高瀬貝・松脂の使用工業者と、日光焼・造花・漆器の製造販売者の問い合わせである。これは、取扱商品の販路拡大と日本側の商品を輸入するためと思われる。商工課では、それぞれ神奈川県東

京搾油(株)横浜工場、同区日清製油(株)横浜工場、鎌倉郡川口村渡邊貝細工製造工場、中区鈴木塗料店(取扱店)と、中区加藤虎雄(取扱店)、同区加藤仙吉、同区横浜漆工会を紹介する案を作成した。なお、起案には、日光焼の注記として「日光焼ト称スルモノ当地方ニナク、加藤虎雄商店ハ「日光」ナル商号ヲ有シ同店取扱ニ係ル焼物ノ底部ニ「ノマーク」があるので、日光焼と呼称していると想像するとしている。

このほか海外からの産物や業者の問合せは、朝鮮半島や一九三一年(昭和七年)に建国された「満洲国」新京などからである。咸北(咸鏡北道)城津郡臨溟市に所在している金泰鉉商店から「横浜商工会」宛の問合せは、古着卸商の住所・店名等について知らせて欲しいというものであつた(三二年一月二七日)。同店は神奈川県内から古着を仕入れていたが、古着卸商の住所や店名を知らない店も多く、注文する時に不便が多いとして問い合わせきていた。回答の文書は綴じられていない。

また、新京の乾隆公司から商工課宛の問合せでは(三三年四月二九日)、この商店は前年に開店し「内地各府県の特産品を汎く満洲国一円に互に宣伝販売」しており、神奈川県の特産品を紹介して欲しいとのことであつた。また年末詳だが三三年末か三四年初と思われる新京の新興洋行からの問合せは、「府県下に於ける代表的珍物名産品」の名称・製造者等を知らせて欲しいとい

うもので、具体的に菓子類(果実野菜類の加工品)、海産物の加工品(突出しビールの肴又は簡単な副食物に適するもの)、漬物味噌(漬物は味噌漬、奈良漬の類)、其他で四〇五〇日間腐敗変味しないものに限るとあつた。乾隆公司同様に印刷の依頼状であり(活版と孔版)広範囲に送付したと思われるので、「満洲国」成立に伴って進出したのであろう。両方の依頼状には「商工時報」第二十一号を貴酬送附」と朱書きされておられ、回答として「神奈川県商工時報」第二十一号を送ったことが分かる。

一方、国内の商店等からも様々な問合せがあつた。

大阪市の直輸出入業松島商店輸入部からは珈琲豆問屋・香料問屋の氏名・住所の問い合わせがあつた(三三年一月か)。依頼文には鉛筆書きで、珈琲豆問屋として中区のミカドヤ食料品店・同区木村商店、香料問屋として同区諸貫薬局と書き込まれており、これらの店名・住所を回答したと思われる。同じく大阪市の合資会社荒川商店からは「万一貴県下に於て右松根油製造業者有之候は、」知らせて欲しいとの問合せがあつた(三三年四月六日)。荒川商店はテレピン油・工業用薬品を扱っており工場も有していた。太田町一丁目の西島商店に回報され、回答の書き込みがある。また広島県竹原町の山陽葡萄園松田茂からは香料黒文字油問屋の所在を問い合わせきてきている(年末詳)。「十月三十一日貴酬」とのみ朱書きされてお

回答の内容は判明しない。八戸市菊地商店からは落花生問屋の所在の問い合わせがあった(一九三四年一月か)。落花生卸小売商として中区の上総屋重田重吉と朱書きがされており、同店を回答したものとされる。大阪も含めていづれも比較的遠隔地で「不案内」のための問合せであった。

しかし、近いところからの問い合わせもあり、川崎市の藤屋百貨店調査部からは県内の海産物・農産物の内、他県への移出可能性がある著名食料品、特産食料品などの問い合わせがあった(一九三三年)。これらを「当地に御紹介申上度存候」とあり、全国的に問合せをしたものと思われる。鎌倉町山石永一郎からは、県内のタケノコ缶詰製造業者の問い合わせがあった(三四年一月か)。これに対しては朱書きから磯子区四ツ菱食品株式会社を回答したものとされる。この他、組織や学校等の様々な問い合わせがあった。

通知と依頼を兼ねたものもあった。一九三一(昭和六)年七月一三日ジャパン・ツーリスト・ビューローと日本産業協会の「上海商品見本陳列場開設に関する件」は、JTB上海案内所における陳列場開設を通知するとともに「御賛助の上参加御申込賜度」と依頼をしている。陳列場の仕様とともに図面とJTB上海案内所の写真が添付されている。

国内からも物産紹介所・陳列場の物件として三菱合資会社地所課長から丸



写真2 ジャパン・ツーリスト・ビューロー上海案内所、「昭和九年 神奈川県内製産実用工芸品調査書」(市史資料室所蔵資料1133) 所収

ノ内ビルディング内の一画の紹介があった(三二年一月二日)。丸ビルの案内図や区画の位置図・陳列棚の配置図・陳列棚等の図も添付されていた。区画は東京駅から皇居方面の道路に面した一階入り口横の一画と反対側の皇居に近い角の一画であった。

同年八月には、北海道釧路国支庁から長切一等昆布の見本配布の依頼があり、これに関する起案等が綴られている(三二年八月一日・八月二四日起案)。この依頼により、八月五日付「送状」(出荷主は釧路国支庁)で大隅丸に積まれて一束の昆布が送付されて来た。一〇日の起案では、「横浜塩干魚海産物商同業組合」と「横浜生魚塩干株式会社」宛に送付したようである。先方からは併せて「昆布推奨・見本送付状」・「昆布価格調其他」・「昆布ノ効用ニ就テ」・「昆布調理方法」も添付されていた。送付状によると「客年勃発セル日支事変」

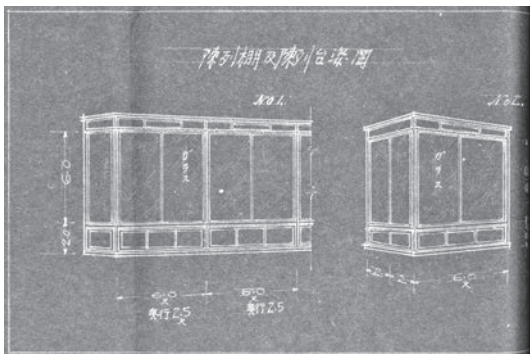


写真3 丸ビルの陳列棚・陳列台姿図(青焼)、「昭和九年 神奈川県内製産実用工芸品調査書」(市史資料室所蔵資料1133) 所収

によって「本道ノ海産物ハ中華国民ヲ唯一ノ華客トスル關係上」「販路ノ梗塞ヲ来シ」たとあり、事変前、根室地方産昆布は九割以上を上海中心に販売していたという。また他の漁業も不漁と価格安のため漁業者は「悲惨ナル状態」となっていると書かれている。これに対し転送先からの反響があり、商工課では「長切一等昆布見本ニ関スル件」(三三年八月二四日起案)により回答したようである。これによると横浜塩干魚海産物商同業組合から引き合いがあり、見本よりも良質で砂混じりがないもので事前に見本送付を条件とし、一〇〇石(四〇〇〇貫)を希望していた。

その他、通知類としては社団法人日土貿易協会が社団法人近東貿易協会への改名通知(三二年六月一日)などもある。

起案「東亜輸出組合設立ニ関シ御依頼ノ件」は「対満経済進出具体案」として組織された輸出組合の現地駐在員を依頼するものであった。安東県・大連市・新京・吉林・哈爾濱・齊々哈爾にそれぞれ一人宛を依頼している。このうち、安東県・大連市・吉林の駐在員を依頼された三名の承諾書も綴じられている。また、輸出組合結成を扱った『商工協会報』一九三三年四月二〇日も合わせて綴じられている。

同三三年一月一日には、神奈川県商工協会主催日埃貿易懇談会が開催され関係文書が綴じられている。エジプトとの貿易は、二九(昭和四)年に出超となり、前年には二倍以上となっていた。世界がブロック経済化に進むなかで、日本にとって制約が少ない貿易相手は貴重であり何らかの対応が求められた。そこで政府は両国親善と貿易の発展に期するために経済界に働きかけ、一月には日埃貿易協会が組織された。この懇談会もそのような流れの中で計画された。懇談会の司会者挨拶要旨や既に設置されていたカイロ日本商品館への出品者一覧、日埃貿易協会創立関係の文書も綴じ込まれている。

この他、簿冊に綴じられているいちばん多い文書は刊行物の寄贈依頼である。刊行物依頼は、「横浜港外国貿易概況」・『神奈川県商工時報』と特定している場合と、単に「神奈川県産業一覽」(東京商工会議所・三三年九月二日)、「研究資料」(大分高等商業学校商事研究部・

表1 実用工艺品調査要項類が綴じられているもの

品名及業種	生産業者・団体
美術陶磁器製造	真葛合名会社
横浜陶器「横浜絵付」	横浜陶磁器商工同業組合
横浜漆器「芝山漆器」	村田商店 村田勝次郎
硬質サクラ漆器	河野篤二 産靖社主
横浜輸出彫刻家具	有限責任横浜輸出彫刻家具信用販売 購買利用組合(調査)
鍍金金銀銅器	四代目 玉川寛平
津久井絹織物(内地向小巾)	北相織物同業組合
愛川輸出絹織物(広巾)	愛川輸出絹織物製造業組合
輸出絹織物及輸出入造絹織物手工捺染品生産	横浜輸出織物染色工業組合
機械刺繍	橋本要次郎
絹手刺繍	山本直次郎
絹手巾	岡本勇吉商店
絹手巾・綿綿キモノ・綿寝衣・綿製肌衣・綿製クツシヨン・綿製蒲団・ 綿製ビジャマ・ワイシャツ・テーブルクロス・センター・モザイク・ ドイリ・ドロンウオーク・パテンレース	横浜輸出織物加工品同業組合
子供服・シャツ・子供帽子	吉善縫製工場 吉村善一
箱根物産 木竹製品	箱根物産同業組合
鎌倉彫	後藤博古堂
綿タヲル	吉浜タヲル生産組合
藤椅子	鴻利号李祐占
藤柳製品、椅子類、乳母車其他諸種柳行李果実籠其他	横浜藤柳製品商工組合
鞆皮革製袋物	清水屋鞆店 外
革製袋物	〔清水屋鞆店 外〕
箱根物産「木製玩具」	箱根物産同業組合
江ノ島貝細工	江ノ島貝細工組合
鎌倉貝細工	湯浅新三郎
横浜人形	〔記入なし〕
団扇	川井栄太郎
莫大小製品(肌衣、靴下、手袋、首巻、脚絆、袖生地)	横浜莫大小同業組合
輸出雑貨(玩具・ベビーシューズ・押絵細工・ピンクッション・紙製 品・団扇・電気笠等)	〔記入なし〕
セルブ鉛	横浜セルブ合資会社
金モール	合名会社加藤重利商店
輸出洋傘及内地向洋傘	横浜輸出洋傘工業組合
麻真田	横浜輸出麻真田工業組合
婦人帽子製造販売業	合資会社ウルベ婦人帽子店
造花	加藤仙吉
大山物産	大山物産組合
蓄音機 製造及販売	株式会社日本蓄音器商会
蓄音機、レコード	日本ビクター蓄音機株式会社
オルガン・ピアノ	日本楽器製造株式会社横浜工場

三四年二月七日)、「編纂経済関係冊子」(広島県産業奨励館・三四年九月一八日)などもあり、依頼に合致した刊行物を送付したようである。

実用工艺品調査関係資料

簿冊表題に関する資料は「調査材料」と書かれた紙により仕切られたままとりとなっている。

調査は、一九三四(昭和九)年一月二六日付九商第五二号により行われた

実用工艺品に関する調査で、これによる回答等が綴られている。主に「九商第五二号附属 実用工艺品調査要項」という用紙に記載されているが、一部、罫紙などに同様の項目により記載した文書もある。また、調査先によっては調査先からの回答ではなく、課内で独自に記載したと思われる用紙もあり、この場合は下書きと思われるような記載のものが多く、表1は調査要項類が綴じられている工艺品の一覧であるが、

個人・個人商店、同業組合など各種組合、比較的大きな日本ビクター等まで様々である。記載もセルブ鉛、麻真田等の比較的詳しく書いている産業もあれば、記載が簡単な産業もありまちまちである。このように実用工艺品に關しまとめた



写真4 横浜人形 横浜人形親土会
(市史資料室写真33868・「行幸関係アルバム」1929年)

ものではなく、あくまでも「調査材料」が綴じられている簿冊である。

同表で調査対象をみると横浜市や県内の著名な工艺品が多い。真葛焼や芝山漆器、鎌倉彫、箱根の木工品、貝細工など盛衰があっても現在まで残っているものである。

このうち横浜市以外は、津久井絹織物(内地向小巾)、愛川輸出絹織物(広巾)、箱根物産木竹製品、鎌倉彫、綿タヲル(吉浜タヲル生産組合―現湯河原町)、箱根物産木製玩具、江ノ島貝細工、鎌倉貝細工、大山物産、蓄音機製造及販売(株式会社日本蓄音器商会―川崎市)である。産業別では、やはり繊維産業が多い。

このうち、いくつかの物産・産業については補足しておこう。硬質サクラ漆器は、河野篤二・北村品子が発明した「硬質紙器製造法」(一九二三(大正一二)年、特許第四四九九号)により作られた紙器を漆器にしたものである。二七(昭和二)年、最初は本牧に製作工場を設置し、紙くずを買って原料に

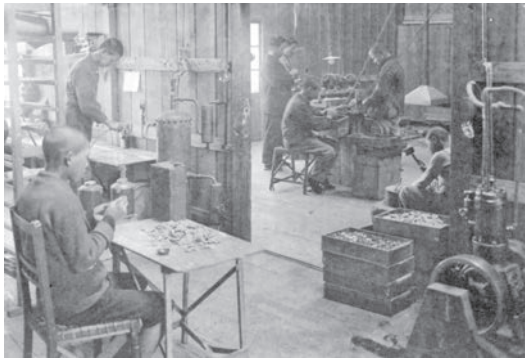


写真5 セルブ釦製造 横浜セルブ合資会社
『横浜市家内工業調査委員会誌』(横浜市役所)
1929年口絵

して漆器を製造したという(寺島柁史『日本現代の発明家物語』三〇三ページ)。その後、井土ヶ谷町に産靖社という工場を設置し本格的に製造していた。三三年には、河野・北村は全国発明表彰進歩賞を授与されている。

鍮起金銀銅器は、玉川寛平の祖先が江戸時代から製造しており、現在も新潟県燕市に玉川堂として継承されている。横浜には、三〇(昭和五)年に四代目が鈴木達治の勲奨によって分工場を設置した(玉川堂 Web:https://www.gyokusendo.com/)。

セルブ釦は、斎藤圭一の特許(二七年、特許七一二二〇号)を元にし、斎藤が東京の三田で製造していたセルロイド・パルプ製ボタンであり、(財)横浜市家内工業振興会の工業資金により中区北方町に工場を設置し製造、そのため横浜釦と呼ばれた(『横浜に於ける中小工業』)。

この調査の調査項目には、生産高や従

業員数などの基本的な数値や原料・材料、これらの産地、製品の特徴等の概要や研究、輸出額、相手国、そして将来の生産・輸出見込などがあった。調査が行われた頃は昭和恐慌の影響から脱出しつつある時期なので、景気や売れ行き・将来見込が書かれている産業は、一九二〇(大正九)年頃が最盛期で昭和初期には恐慌で落ち込み、やっと上向いてきたと書いているところが多い。芝山漆器のように明治初年からの産業では、「明治三十八九年ノ日露戦争直後ハ非常ナ好況ニメグマレ、ソノ後欧州大戦後ニモ相当ノ輸出ヲミタレ共昭和二三年を境トシテ余リ振ハズ」と日露戦争直後にピークを迎えていたところもある。芝山も将来見込では「室内装飾家具トシテ応用セル「芝山漆器」モノノ一二年幾分回復ノ萌シヨ示シ居リ品質ノ改良ト相俟ツテ相当ノ進展ヲ期待ス」と回復しつつあると書いている。

横浜輸出彫刻家具は、「震災前二ハ及バズモ(参考大正拾年前後は年産額凡金卅五万円位)、年々生産高増加セルモ資金ノ関係上品価ノ低下ヲ駆逐ナラズ、年々品位ノ低下ヲ残念ト見ルモ輸出業者トノ取引上ノ利得関係上不止得トスルモ斯業品ノ今後衰フベキヲナキカト憂慮スルモノナリ」と生産高は増加したが輸出商との関係で品質は低下してきており衰退を憂慮するものもある。

輸出がほとんど無い産業もあり、ビクターは販路を「日本全土」で輸出は「ナシ」と記載している。婦人帽子は「支那方面にも輸出・移出を企画し、現に

上海方面に輸出せるも其額未だ多からず」と輸出を進めようとしている段階の産業もあった。

* * * * *

このように実用工芸品産業の括りにより個人生産から大工場まで対象となり、調査目的の文書がないためと「材料」の段階であるので分かりづらい資料である。この時期は、横浜地域に限るが、一九三五年に横浜商工会議所が市内の中小工業を調査し、『昭和五年末現在横浜に於ける中小工業』(一九三六年)を発行しており、実用工芸品とは視点は違うものの産業・製品の重なりは多い。この調査報告書は、産業・製品に関しそれぞれ数十ページを費やし、詳細な記述となっている。家内工業の調査では一九二六(大正一五)年三月発行の『横浜市商工業報』第一九号、三七(昭和一二)年調査の『横浜市家内工業調査書』



写真6 莫大工 讓原工場 (萬栄莫大小) 『横浜市家内工業調査委員会誌』(横浜市役所) 1929年口絵



写真7 ドロンウォーク卓子掛 横浜輸出織物加工同業組合 (市史資料室写真33861・「(行幸関係アルバム)」1929年)

もあり、その他、個別の産業について記載した報告・記事なども商工会議所等の刊行物に掲載されている。また同時代に『横浜市史稿』産業編(一九三二年)もあり、今回紹介した資料は、これらのまとめられた資料と比較すると、それぞれ断片的なものであることは否めない簿冊である。

【参考文献】

『横浜市家内工業調査委員会誌』(横浜市役所) 一九二九年、『意匠制度120年の歩み』(特許庁) 二〇〇九年、『湯河原町史』第三卷(湯河原町) 一九八七年、『調査資料第二七輯 朝鮮の市場経済』(朝鮮総督府) 一九二九年、寺島柁史『日本現代の発明家物語』(文教書院) 一九三三年、「河野篤二君に聴く」(『発明』三〇一七) 一九三三年七月。

※文献の多くは国立国会図書館デジタルコレクションに依った。

所蔵資料紹介
『モード』第七号
(一九五七年三月)

『モード』は、岩崎学園・横浜洋裁学院同窓会が発行した雑誌である。岩崎学園は、岩崎春子が一九二七(昭和二年)に創立した、横浜洋裁専門女学院を始まりとする。

戦後再開された学校の同窓会員から、機関誌を出して欲しいという要望があり、一九五〇(昭和二五)年五月に雑誌を創刊した。神奈川県内で発行された、唯一の服飾専門誌であった。当初、発行部数は、八〇〇部くらいだったという。流行をリードするという意味で、岩崎が「モード」と名付けた。洋裁技術を専門として、立体裁断の技術を掲載した。同誌のナンバーを追うことにより、流行の変遷がわかる。

第一七号は一九五七(昭和三二)年春に発行されたもので、学校を卒業し社会に巣立つ人に向けて特集を組んだ。セーラー服など高等学校の制服を更生して、ワンピースやツーピースを作成する方法が紹介されている。それらを



『モード』第17号表紙(平出スミエ画)
横浜市史資料室所蔵

実際に着用したモデルの写真が、グラフィア頁に掲載された。

諸岡美津子「服装を整える時のために」では、「既製服の買い方」を伝授している。それによれば、洋裁学校が発達し、街角に一軒ずつ洋装店が立ち並ぶなか、既製服の問題が取り上げられるのは、経済的な理由のほか、手に入るといふ利点があるからである。そして、注文服の半分くらいの価格で買うことができるのは、大量生産であるからである。したがって、オシャレの本質ともいえる「自分以外には着てないもの」を着る、といった希望はなくなる。近頃は業者も品質向上に力を入れていくから、昔ほど粗悪なものはない。しかし、既製服を買う場合には、デザイン、生地、豊富さという点から、デパートか専門店を選び、よく店員と相談してみるのだという。購入される洋服が、注文服から既製服へと移っていく頃の様子が変わる。

また、「活躍する二組のともかせぎ」として、当時一般的でなかった共働きをする服飾関係者二組のカップルを紹介した。そして、岩崎の郷里である三島市の、北上青年団を訪ねる「農村青年に聞く」という企画もあり、「農村の働き着」のデザイン画を示している。

横浜市史資料室は、第一七号から第一五号(一九六六年八月)までの『モード』を所蔵しており、申請のうえで閲覧が可能である(但し、第二一、二二、二三、二七、三五、四〇号は欠号)。

(上田 由美)

《市史資料室たより》

【令和6年度横浜市史資料室室内展示】

◆「雑誌にみる女性たちの集い
—『令女界』と女学校同窓会誌から」
会 期：7月27日(土)～11月9日(土)
時 間：午前9時30分～午後5時
会 場：横浜市西区老松町1番地(横浜市中央図書館地下1階)当室内

◎入場無料



R・J・R東京・横浜支部合同ハイキング
1940(昭和15)年3月大倉山公園にて 篠原あや資料

【令和6年度横浜市史資料室講演会】

「野毛界限彫刻巡礼
—清正公と井伊直弼と美空ひばり」(仮)

講 師：木下直之(静岡県立美術館館長)
日 時：9月28日(土)午後2時～4時
*申込み方法等の詳細は講演会のチラシおよび当室ホームページをご覧ください。

【寄贈資料】

- 1 浅野幸江様
浅野俊博資料 238件
- 2 澁谷惇江様
澁谷栄之助資料 15件
- 3 伊賀上幸様
飛鳥田一雄資料追加 29件
- 4 瀧澤 智様
横浜市立東高等学校学校新聞 1件
- 5 小山芳美様
小山芳美家資料追加 3点
- 6 横山 聖様
陸軍歴当て、横浜市銃後奉公会顕彰旗、他 3件

【横浜市史資料室のご利用について】

横浜市史資料室は、取り寄せが必要な資料が多いため「事前予約の方優先」によるサービスの利用を案内しております。事前に電話、eメール等でご利用方法等をご相談ください。予約なしで来室された場合、閲覧を希望される資料によっては、取り寄せの関係から別日にご案内する場合がありますのでご了承ください。ご不便をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

【資料提供のお願い】

当室では昭和期の横浜に関する国内外の資料の収集・保存・調査研究及び公開を行っています。昔の街並みや行事の写真、古い絵はがき、パンフレット、ポスターなど横浜を記録した資料をお持ちの方はぜひご連絡ください。次世代の市民に引き継ぎます。

◇休室日のご案内◇

毎週日曜日及び横浜市中央図書館休館日
8/19(月)、9/17(火)
10/15(火)、11/5(火)

訂正のお知らせ

『市史通信』第49号

- 【4頁 本文 第3段 4行目】
× 七八三戸 → ○ 七三八戸
- 【4頁 図1 図中地名】
× 御立野所 → ○ 御野立所
- 【6頁 写真1 キャプション】
× 田奈の苺共同出荷
→ ○ 田奈の柿「禅寺丸」の共同出荷